

とは直接関係のないことも示し得る。

「あゆむ」

- i) 歩行を表わす場合、方法は「あるく」に同じ。ただし「あるく」よりは速度がゆっくりで、意志性に乏しい。全般的に文語的なニュアンスを含む。
- ii) 時間の進行に基づく抽象的な移動の概念を示す。
- iii) 複合動詞においては、足による移動も抽象的移動も示し得る。

〔付記〕

調査を行なったのは、S. 55. 10、及びS. 56. 1.である。協力して頂いた方々に感謝いたします。

(注1) ムカデやゲジゲジの類では不可。

(注2) 例文(II)は、実際に足を動かして移動することを示し、その運動を補助するために「松葉杖」が使われる。それに対して(9)では、足を動かすことは要求されず、手で車輪を回したり、後方から押しもらって移動するところにやや問題がある。筆者は不自然であるとは特に感じていないが、人によっては問題の多い箇所であろう。

(注3) 年齢によって「あるく」と「あゆむ」を使い分けている話者S(表1参照)は(3)を認めてい

る。この話者のケースでは、幼児以下では「あゆむ」、それ以上になると「あるく」を使うということである。話者Dでは「恋の道ゆき」など限られた場面にのみ可能である、としている。

(注4) これは「あるいた」と「あるいてきた」の間で、アクセントが異なっているためではないかとも考えられるが、詳細については今後の問題である。その他、話者によっては、動作の主体が人であるかないかで「あるいた」と「あゆんだ」に影響があるとする人もあった。ただし調査ではそこまで扱わなかった。

(注5) 歩行運動では、経路などを決めるのは動作主であるが、人生などはこうしたいと思ってもなかなかうまくいかないことがあり、意志だけではどうにもならない、という意。

(注6) 従って、

(i) *あるき 学ぶ

(ii) *あゆみ 話す

などは不可能である。

言語経歴：1957年9月東京都板橋区生。現在に至る。

(東京都立大学学生)

ける・ふむ

木川行央

1. はじめに

(1) 石を ける。

(2) 石を ふむ。

上の二文を比較するまでもなく、ここにとりあげる「ける」と「ふむ」を類義語とは言い難い。この二語に共通する点といえば、国立国語研究所1964で「あるく」「はしる」などと一つのグループにしてあるその項目どおり、「足の動作」であるという点であろう。また、「足の動作」ではあっても「あるく」や「はしる」などいわゆる移動動詞に含まれる語とは異なり、〈接触〉と何らかの関係をもつであろうと予想されることも共通するといえよう。しかし、〈接触〉との関係の仕方もそれぞれ異なる。本稿においては、「ける」と「ふむ」を比較するのではなく、それぞれ違う語との比較を行い、「足の動作」であるという観点からでは

なく、〈接触〉との関係、ひいては〈接触〉と関係する他の語との関係を考えていく。

2. ける

2. 1.

「ける」を、辞書では、次のように記述している。

- ①足で物をつきとばす。足で突いて前や後ろにとばす。(『日本国語大辞典』)
- ①足でつきやる。足でつきとばす。(『広辞苑第二版補訂版』)
- ①足で突きとばす。(『改訂新潮国語辞典』)
- ①足の先で強く物を突きやる、また、はね飛ばす。(『岩波国語辞典第三版』)
- ①足にはずみをつけるようにして、物を突く(突いて飛ばす)。(『新明解国語辞典第三版』)

○ 足でものを強くつきとばす。(『外国人のための基本語用例辞典第二版』)

各辞書に共通するのは、足を用いた行為であるという点、突くという動作である点、そして対象物を飛ばすあるいは動かすという点であろう。このうち、足を用いた行為である点は否定できないであろう。

(3) 太郎は 右足で 石を けた。

(4) 太郎は 石を けた。

(3)のように手段である足を表現する場合もあるが、(4)のように特に手段をいわない場合も多い。しかし、この場合も手段が足であることは当然含意されている。ただし、「足の先」とまで特定することには問題がある。

(5) サッカーボールを 足の甲で ける。

また複合名詞ではあるが「ひざげり」という語もある。日常的には足の先を用いる場合が多いであろうが、広義の「足」の他の部分を用いる場合にも「ける」という語が用いられ、「ける」手段を「足の先」と特定することはできない。

手段が〈足〉ということになれば、動作の主体は当然足をもつものとなる。細かくいうならば、同じ「足」といわれるものを持っているものであっても、虫や蛙・鳥などの小動物が動作主となることは稀であろう。しかし、このような点を「ける」の意義の記述に含めることはしない。手段が動作主の制限をするのと同様、以下に述べる動作に関する特徴も動作主を制限するからである。手段・動作などに関する特徴によってのみ動作の主体が制限され、それ以外の点で制限のないものについては、記述する必要はなかろう。(逆に、もし、手段・動作に関する特徴を満たせば、何が動作主となってもかまわない。通常「ける」の動作主とはならないものであっても、状況によっては、動作主となる場合もある)

次に、各辞書に共通する点として「突く」という語がその説明に用いてあるという点がある。「つく」という語と「ける」という語の意味を比較すると、共通する点としては、いずれも対象物に対し力を加えるという点がある。また類似する点として、「つく」の手段が、先の尖った物あるいは細い物であり、「ける」の手段も足の先という先の尖った物あるいは細い物と意識されうる物である場合が多いという点がある。

(6) 箱を 足の先で ついて むこうに やる。

(7) 箱を 足の先で けて むこうに やる。

しかし、(6)と(7)を比べると、その表すところは異なる。この違いは、「つく」と「ける」の〈接触〉との関

係の違いに帰因するといつてよい。「つく」の場合、木川1979で述べたように、すでに接触している状態から力を加える場合にも用いられるのに対し、「ける」で表される場合、接触している状態からの動作の表現としては用いられない。すなわち、「ける」ためには、接触していない状態にして、あらためて対象物に接触する必要があるわけである。また、「つく」が「ている」と結びついて動作の継続を表しうるのに対し、「ける」が「ている」と結びつくと、多くの場合、継続ではなく反復を表す。この二点がこの二語の相異点としては重要であろう。

さて、最後に「つきとばす」あるいは「つきやる」という記述についてみてみよう。「ける」と表現される状況では、たしかに対象物が飛んだりあるいは転がったりして移動すると考えられる場合が多くある。しかし、常に対象物が動くわけではない。この点は、「おす」と比較して考えられる。たとえば次の例では、対象物が移動するようにみえる。

(8) 机を おす。

しかし、この場合「机」が動くことは必須条件ではない。動かない場合もありうる。

(9) 壁を おす。

この場合にはむしろ動かなかつたと解されるのではなかろうか。しかし、(8)にしても(9)にしても、話し手の意図(「おす」という語を用いた意図)としては、対象物を動きうるもの、あるいは対象物を動かすことを目的とした動作であるということがあつたのではなかろうか。木川1979では、この点を、対象を〈可動物〉とすることによって処理した。

では、「ける」の対象を〈可動物〉と考えることができるだろうか。たとえば、次のような例はさほど不自然ではなかろうし、(9)のように一見特殊な例のようにみえるものでもないだろう。もちろん対象を動かすことを目的としない。

(10) 荷物が多いので ドアを けて 部屋の中の 人に知らせ、あけてもらった。

(11) たったひとりの相手をかこんで、たたいりけつりのらんぼうをした。(『外国人のための基本語用例辞典第二版』の用例より)

したがって、「ける」に「対象物が移動する」というような記述は必要ないであろう。

以上のように、「ける」を「つく」や「とばす」という表現で説明することは、妥当でない。

ところで、「ける」には1で述べたように、〈力を加える〉ことが必要である。(1)と、単なる接触を表す(12)

を比較されたい。

(1) 石を ける。(前出)

(12) 石に ふれる。

また、次のよう力が加わったことを示す修飾も可能である。

(13) 石を 力一杯 けた。

(14) 石を 軽く けた。

さらに、「つく」との比較で、「ける」には〈接触すること(すなわち、接触していない状態から接触状態への移行)を必要とすること、また瞬間的な動作であることを示した。これらの特徴は、「たたく」などのいわゆる打撃動詞と一致する。

柴田編1976では、「たたく」や「なぐる」「ぶつ」「はたく」「うつ」に共通する特徴〈打撃を加える〉ということが次のように説明されている。

〈何が、何かに向けて、何かを、勢いよく接触させることによって力を加える〉(p. 187)

このうち、〈勢いよく〉というのがどのような特徴であるのか、はっきりしないが、これを速さと強さと考え、強さを〈力を加える〉に含まれるもの、速さを〈瞬間的〉という特徴であらわされるものと考えれば、「ける」を「たたく」などともに打撃動詞と考えてさしつかえなからう。

「ける」と「たたく」を比較した場合、動作に関する特徴は上述のように一致する。しかし、「ける」動作の手段が足に限られるのに対し、「たたく」動作の手段は、手および手に持ったもの場合が多いとはいえ、他の身体部位、たとえば頭などでもよいし、「ける」と同じ足でもよい。

(15) 足で ドアを たたく。

すなわち、「たたく」の場合、「ける」とは異なり、動作の主体の身体およびそれに準ずるものであればよく、それ以上の制限はないと考えてよい。

では、「ける」と「たたく」の違いは手段に関する特徴の差だけによるものであろうか。

(16) ドアを たたく。

(17) 机を たたく。

通常、(16)は水平方向への動作であり、(17)は鉛直方向への動作と解される。さらに、上下・前後・左右等に関しても制限はなく、方向性についての特徴はない。一方、「ける」には、かかを用いて後へ、足の側面を用いて横へ、足の先を用いて前へ力を加える場合はあるが、足の裏を用いて、下へ、すなわち鉛直方向に力を加えることは表さない。つまり、一見したところ、動作の方向が限定されているようにもみえる。しかし、

足をも手段とし得、さらに方向性に制限のない「たたく」を用いた表現でも、「足で鉛直方向にたたく」とはいい難い。これより、「ける」と「たたく」において、方向性に関する特徴に差があるのではなく、むしろ「足の裏」という部分が〈瞬間的〉〈接触する〉〈力を加える〉という特徴を一度に実現するのに不適当な部分である、あるいは通常足の裏を用い上のような動作は行なわれないと判断されるためではなからうか。

また、これまであげてきた「ける」の例文を、「たたく」あるいは「足で たたく」といいかえた場合、「ける」とはニュアンスが異なる、または表現自体不自然となるものがある。その理由としては、一つには「ける」と「たたく」の違いが、手段に関する点だけではなく他にもあるということが考えられる。しかし、それよりも、「ける」が、意義の上で「たたく」に包摂される語であり、いいかえればより具体的な表現となるため、「たたく」よりも「ける」の方がより自然な表現となるのではなからうか。このような点については、さらに考察する必要がある。

以上より、「ける」の意義を次のように考える。

「ける」：〈(動作主が)(動作主の)足で(対象物に)瞬間的に接触して力を加える〉

なお、〈瞬間的に〉という特徴は、〈接触して力を加える〉という特徴全体に関わるものであり、〈接触する〉あるいは〈力を加える〉それぞれ個々の特徴に関わるものではない。

2. 2.

「ける」には、以下のような用法もある。

(18) 船は 波を けて 進んだ。

この場合、「ける」手段となるのは、船の下方、水面に接する部分であり、そこを「足」とみたと考えて考えられる。しかし、実際には、上で述べてきたような意味での〈接触〉は行なわれていないと思われる。(18)の「ける」は、手段が「足」とみたとする部分であること、そして動作の結果、波がとび、それが「ける」動作のあとよく見られる状態であることなどから用いられると考えることができよう。

(19) 席を けて 立つ。

(19)は、実際に「ける」動作(あるいは「ける」というような動作)を行なう場合と、実際には「ける」動作を行なわないが心情的にはそのような動作をおこなう状態を表す場合がある。後者の意味での用法は、2.1.であげた「ける」の意義とは別に、「席をける」という一つのイディオムとして処理するのが妥

当かもしれない。

(20) 公団側が 農民の要求を ける。

(21) 彼が 社長のいすを けた。

これらの「ける」は、〈拒否する〉あるいは〈拒絶する〉意を表す。(20)(21)の二文においても、動作主と対象物が動作の前に接触すること(すなわち、(20)では「公団側」が「要求」を一度うけること、(21)では「彼」が「社長のいす」にすわること)はないとみることができ、2.1.で述べた「ける」の意義と共通する点を認めることはできる。しかし、それで解釈しきれぬものか疑問である。別の意義を考えるべきかもしれないが、ここでは扱えない。

3. ふむ

3. 1.

「ける」が、辞書の記述では「つく」を用いて説明されているのに対し、「ふむ」の第一の説明には、「おす」または「おさえる」が用いられている。

○ ①足で物を上から押しつける。(『岩波国語辞典第三版』)

○ ⊖足で押えて、動かないようにする。

○ ⊖足で押えて、動かすようにする。(『新明解国語辞典第三版』)

○ 1.あげた足をおろしておす。(『外国人のための基本語用例辞典第二版』)

「ける」と同様、手段が足であることは一致している。次の例の「タイヤ」なども、一種の「足」とみたられよう。

(22) タイヤが 釘を ふんで バンクした。

では、「ふむ」と「おす」「おさえる」を比較してみよう。

「おす」「おさえる」の意義を木川1979では次のように考えた。

「おす」:(i)〈可動物に←Ⓐという方向の力を加える〉

(ii)〈(印等) 価値のある痕跡を何かにつける〉

「おさえる」:〈不動物に力を加える〉

〈可動物〉〈不動物〉は、それぞれ、「動きうるものあるいは動くものと話し手が想定するもの」、「動かぬものあるいは動かなくなるもの」を表す。「おす」(i)と「おさえる」は、この点で対立する。また、〈←Ⓐ〉という特徴は、Aが動作の主体を表し、その主体から離れる方向を←○が表す。「おす」(i)はこの特徴によって、〈→Ⓐ〉という特徴をもつ「ひく」と対立

する。「おす」(ii)は、ここでは直接関与しないので、以下では「おす」(i)を「おす」という)

両語ともに、〈力を加える〉という特徴だけが与えられている。これは、実際に接触することがなくともよいということではなく、意義記述の上からは余剰的なものであるということである。

さて、「ふむ」であるが

(23) ベダルに 足を のせ ふんだ。

の場合、「ふむ」は「ベダル」と「足」が接触したことまでは表さず、接触後力を加えたことを表す。もちろん、

(24) まんじゅうを ふむ。

のように、力を加える以前に、対象物と足が接触したことをことばで表さない場合もあり、接触することから力を加えるまでを「ふむ」で表しているとも解釈できる。しかし、この場合でも、「ふむ」が意味するところは、〈力を加える〉ということと考えられる。

ところで、(24)の例では、あまり力を加えているとは意識されないかもしれない。これは、「おさえる」における

(25) 紙を 石で おさえる。

のような例と同様、足ひいては足がささえているものの体重のかかることが、結果的に、力を加えるのと同じ働きをするものとする。さらに、次の例では、体重がかかることも意識されないかもしれないが、一応ここにまとめておく。

(26) このラインを ふむのは 反則だ。

この例も、「おさえる」の次の例と比較して考えられる。

(27) 指で 地図上の一点を おさえた。

さて、「ふむ」の対象が〈可動物〉か〈不動物〉か、いいかえれば動作の目的として、対象物を動かすということがあるかどうかという点であるが、この語においては問題とならない。(23)では、「ベダル」を動かすことが目的とはならない。(24)(25)では動かすこともまた動かさないことも目的ではない。もし、動かすことが目的となるならば、そしてそれを特に表現する場合には「おす」が用いられる。

(28) カランを 足で おさないで下さい。

したがって、「ふむ」の意義には、「おす」「おさえる」にみられる、対象に関する特徴(あるいは動作の目的に関する特徴)は与えられない。これは、同じ〈力を加える〉という特徴をもつ「つく」と同じである。

ところで、さきに手段は〈足〉であるとしたが、「ける」とは異なり、足の甲や側面で力を加えても

「ふむ」は用いられまい。もしそのような状況を表すとすれば、「おす」か「おさえる」が用いられるであろう。

(29) 箱を 足の甲で おす。

(30) *箱を 足の甲で ふむ。

(31) 足の横で ドアを おさえる。

(32) *足の横で ドアを ふむ。

また、足の裏を用いたとしても水平方向に力が加わるならば、「ふむ」は用いられない。

(33) *寝ころんで 箱を ふんだ。

〈力を加える〉という特徴に、体重をかけることをも含めた点とも関連するが、「ふむ」場合、力が加わるのは鉛直方向に限られる。そして、この点は、上の例から、手段による制限とも言い難い。したがって、〈垂直方向に〉という特徴も、「ふむ」の意義特徴の一つとしてあげておく。

以上より、「ふむ」の意義は次のようになる。

「ふむ」：〈(動作主が) (動作主の) 足で(対象物に) 鉛直方向に力を加える。〉

3. 2.

「ふむ」には、3.1.で述べた以外にもいくつかの用法がある。

(34) アメリカの土を ふむ。

この例は、実際に「土を ふむ」動作からの表現といえよう。しかし、

(35) 初舞台を ふむ。

(36) 正規の手つづきを踏んでビザをもらうには3か月かかります。(『外国人のための基本語用例辞典第二版』の用例より)

などの例は、3.1.で述べた「ふむ」の意義と関連する

ものと想像できるが、別の意義を考える方が妥当かもしれない。

さらに、次の「ふむ」にも別の意義を考えるべきであろう。

(37) このダイヤモンドのゆびわは安く踏んでも100万円はします。(『外国人のための基本語用例辞典第二版』の用例より)

また、次のような、イディオムと解されるものもある。

(38) 二の足を ふむ。

(39) じだんだを ふむ。

(40) 韻を ふむ。

これらの「ふむ」については、ここでは述べない。

4. まとめ

以上みてきたように、「ける」は「たたく」などの打撃動詞と、「ふむ」は「おす」や「おさえる」「つく」などの動詞と共通する点が多い。したがって、これらの語を分類していく際には、「足の動作」という、いわば手段を基にしたグルーピングとともに、動作の特徴によるグルーピングが必要である。そして、語彙の体系あるいは構造を考える場合(動詞の場合)には、むしろ、後者のグルーピングが優先されるべきではなからうか。この語に限らず、このような観点から、「足の動作」あるいは「口の動作」などと一まとまりにされている語の再分類を行なう必要があろう。

言語経歴：1955年3月 兵庫県西脇市生0歳～18歳 西脇市 18歳～22歳 静岡市 22歳～ 東京都大田区 (東京都立大学大学院学生)

さける・よける

杉本 武

1. はじめに

本稿で取り上げる「さける」と「よける」は、国立国語研究所1964では、「2.353競走・攻防・勝敗」に分類されている。この二語は、漢字とかなで表記する場合、いずれも「避ける」になる。そして、

(1) 自動車を 避ける。

のような文では、「さける」と読むべきか、「よける」と読むべきかは、これだけからは判断しがたい。とこ

ろが、

(2) 人目を 避ける。

では、「さける」としか読めない。また、(1)を「さける」と読んだ場合と、「よける」と読んだ場合とでは、意味は等価ではない。

そこで本稿では、このような、両語の意味の違いを明らかにしていきたい。